

[論文]

表現を通した「生きづらさ」の飼い慣らし —「弱さ」を分析視点として

杉本洋(新潟医療福祉大学健康科学部看護学科)

抄録

病気や障害を有する人々は、様々な「生きづらさ」を抱え、セルフヘルプ・グループや芸術活動といった実践はそれへの対処の術(飼い慣らし)ととらえられる。「弱さ」は単に排除すべきものではなく、人々をつなげるなどの価値を有するものであり、アートをはじめとする表現はその成果物と共にプロセスもまた重要な意味を持つ。

本研究は、ひきこもりや心の病いを持つ人々が詩の朗読や音楽などのパフォーマンスを行う団体の活動におけるフィールドワークを通して、いかにして「生きづらさ」が飼い慣らされているのかを、弱さの価値や表現のプロセスに着眼して検討した。

表現活動を行う人々は家族のような関係を時につくりあげ、悩みや不安、体験的知識を共有する。一方で表現者は活動を行う中で批難に曝され、不安や負担を感じつつ、弱い状況に置かれながら表現活動を続ける。そして、「生きづらさ」は時に病気や障害に限らない普遍性を有する形に編集され、表現される。

こうした実践からは、表現活動は「弱さ」を活かした悩みや体験的知識を共有する実践であると共に、自らが表現という行為を通して弱くあるため、「弱さ」を生み出すための実践であり、普遍性を有する「生きづらさ」を探求する営みであると考えられた。これらから、当事者による「生きづらさ」の飼い慣らしは、「弱さ」を生み出す表現を通して、人間存在にとって普遍的・根源的な「生きづらさ」の探求によってなされていると考えられた。

Key word

弱さ、生きづらさ、表現、飼い慣らし

1. 諸言

本研究は心の病やひきこもりなどのメンタルヘルスにかかわる当事者によるパフォーマンス活動を通して、「生きづらさ」を扱う術を考察するものである。

古くより、医学的な「疾患(disease)」のみではなく、経験としての「病い(illness)」があり[Eisenberg 1977; Young 1982]、「病気」は単に生物医学的な状態を示すのではなく、固有の経験や、社会的言説を含む社会との関係に至るまで幅広い意味合いを有するといわれている。そのため、病気を抱える人びとはいわゆる疾患のコントロールのみならず、様々な社会的関係の調整やアイデンティティの再構築など様々な「仕事」が課されることになる[Corbin and Strauss 1985]。「生きづらさ」はつらい出来事とそれを感じる形式といわれ(田畑 2010)、福祉や医療の枠組みにはおさまらない多様な語られ方をする困難をあらわすものとされる(川北 2010)。本研究ではそう

した知見を踏まえ、病気や障害の当事者が直面する多様な困難ごとを「生きづらさ」と表す。「生きづらさ」に対する取り組みとしてはセルフヘルプ・グループ、障害者運動などにおける実践などがあり、そこでは孤立しがちな人びとが参集し、共感すること、体験的知識を共有し、時に社会に対して自己主張、社会変革の要請をしていることが示されている[岡 1988; Hill 1984=1988; Katz 1993=1997; 自立生活センター協議会 2001; 横塚 2007]。

一方、「表現」においては、当事者による創作活動が単なる狭義のリハビリテーション的な意義を超えて、高い評価を得ている作品を生み出していることが示されている[服部 2003; 足立 2000]。また、演劇、プロレスなどの表現に通じる実践からは、当事者が障害などの属性を単にマイナスとしてとらえるのではなく、逆に価値を見出し、生き様を表していることが示唆される[西倉 2010; 倉本 1999; 杉本 2013]。このような取り組みは、否定的な状況におかれてきた当事者の価値を顕在化させ、自己肯定感の獲得をなす一助となってきた。そして当事者によるアートの活動の意味は自己肯定感の獲得や価値の顕在化を超えて広がっていることがうかがえる。たとえば当事者によるアートの成果物のみではなく、表現自体、プロセスとしてのアートの重要性の指摘がなされ[藤沢 2014]、アートはコミュニケーションを閉ざされた人の交信力を発揮させるといわれている[松尾 2015]。メンタルヘルスを中心とした生きづらさを抱える人びとによるアートをはじめとする表現には、その孤立や弱さがあるからこそその世界との接点をつくる技法が顕在化し、表現のプロセスを通して「生きづらさ」を扱う術を見いだすことができると考えられる。

さて、本研究は「弱さ」を分析の視点として「生きづらさ」を扱う術を検討する。本論文では、「弱さ」は「傷つきやすさ、脆さ、壊れやすさ(鷺田 2001: 174)」という意味合いで用いている。「弱さ」は、傷つきやすい、ひ弱いといった状態を表す「バルネラビリティ」(金子 1992)、脆くて壊れやすい脆弱性を表す「フラジリティ」(松岡 2005)といった観点から考察されている。そこでは、「弱さ」は強さの欠如ではなく可能性に満ちたものであり[松岡 2005; 鷺田 2001]、人をつなぎ、関係性を開くものであるといわれている[金子 1992]。そして、遊びやアート、無駄といったものと親和性を持ち、「弱くある知恵」が考察されており[高橋・辻 2014]、「弱さ」を分析の視点とすることで、弱い状況に置かれがちな当事者の知といえる「生きづらさ」を扱う術が明らかになることが期待される。「弱さ」を大切にする実践は、本研究のフィールドと重なる精神保健福祉分野でもみられる。精神保健福祉分野で先駆的な活動を行ってきた「浦河べてるの家」は、病気や困りごとに対する画期的な術を編み出してきた。たとえば、「弱さの情報公開」「弱さを絆に」といったフレーズを編み出した。そして、「弱さ」を公開し、時に当事者研究といった「研究」という形で、困りごとに対する知恵を創造、共有する取り組みをなしてきた[向谷地 2002; 浦河べてるの家 2005]。「弱さ」についての知見は積み重ねられつつあり、本研究ではそれらを受け、可能性に満ちた「弱さ」と、「生きづらさ」を区別して扱う。そして、「弱さ」を「生きづらさ」の原因ととらえるのでもなく、むしろ「生きづらさ」を扱う上での資源として想定する。

また、本研究では「生きづらさ」を扱う術を「飼い慣らし」と表している¹⁾。「生きづらさ」を抱える当事者は、「生きづらさ」を解釈し、「生きづらさ」と交渉しながら、「生きづらさ」を「飼い慣らし」ている。本研究で「生きづらさ」を扱う術を「飼い慣らし」と表すのは、当事者が、自らを苦しめ、排除されがちな「生きづらさ」を創造的、多面的に扱う様を表すことを意図していることによる。

「生きづらさ」の飼い慣らしは、セルフヘルプ・グループなどにみられる共感による孤立感の解消や体験的知識の共有、障害者運動などによる社会に対する働きかけ、芸術活動による価値転換および自己主張といった取り組みにみられる。しかしながら単に「生きづらさ」の排除や価値転換に留まらない、資源としての「弱さ」に着眼した表現のプロセスに潜む「飼い慣らし」の検討の余地が残る。

表現を通じた当事者の生きづらさの飼い慣らしの理解を進展させることは、狭義のパフォーマンス、表現のみならず、自らの経験を語ったり様々な活動を行う多くの当事者に通じる生きる術の理解の進展につながると考えられる。

2. 方法

2-1. 研究フィールドの概要

本研究は、心の病いやひきこもりの経験を有する人びとが集う芸能プロダクションである「K-BOX」、および詩の朗読などのパフォーマンスでアルコール依存や、摂食障害、社会不安障害などの心の病い、経験、同じような生きづらさを抱える人びとに対してメッセージを発する活動である「こわれ者の祭典」という活動、団体、そこにかかわる人びとを対象としたフィールドワークに基づいた成果である。なお、筆者は各団体より調査許可を得、フィールドワークの実施、および研究成果の公表を行っている²⁾。

K-BOXには、音楽やアートなどの活動を行う20名程度のメンバーが所属している。2003年より「レッスンルームにいがた」という名で活動が始まり、2006年3月に「K-BOX」と名を変えて活動が継続されている。メンバーは20歳前後から40歳代に至るまでの男女に幅広くわたり、新潟市内福祉施設などにおける「レッスン」という練習の場と、2か月に一度程度開かれる定例ライブ、その他音楽や朗読に特化した企画ライブ、地域の祭などへの所属タレントの出演といった活動を行っている。K-BOXは摂食障害やひきこもりの経験を有しながら、表現により救われた経験を持つKaccoさん³⁾が代表として団体を率いている。KaccoさんはK-BOXの運営と共に、イラストの技術を活かした似顔絵ライブ、各種当事者・家族・支援者向けの講演会なども活発に行っている⁴⁾。

「こわれ者の祭典」は、アルコール依存などの経験を有する月乃光司さんが代表を務める活動で、現在メンバーは代表の月乃さん、先述したKaccoさん、社会不安障害などを抱えるアイコさんの3名であり、新潟や東京でイベント「こわれ者の祭典」を行っている。こわれ者の祭典は著名人をゲストに招いたり、多数の著書をメンバーが出版するなど⁵⁾、全国的な活動の波及がみられている。主なパフォーマンス内容は、自作詩の朗読パフォーマンスで、自らの経験や発したいメッセージをユーモアを交えて表現している。また、KaccoさんがK-BOXを主宰しているように、アイコさんは、「カウンター達の朗読会」というイベント⁶⁾を当事者であるパフォーマーと共にいるなど、メンバーは個々人のレベルにおいても活発に活動を行っている。

2-2. 分析

本研究では上記病気などの経験を有する当事者がパフォーマンス活動を行う事例を通して、いかにして「生きづらさ」が表現を通して飼い慣らされているのかを「弱さ」を分析概念として検討する。「生きづらさ」がいかに飼い慣らされているのかを考察するには、「生きづらさ」にかかわる実践を行う人びとに共有される顕在的のみならず潜在する信念や価値観、慣習といったものをとらえることが求められるのであり、それらの理解を深めるためには、長期のフィールドワークに基づくデータ収集と分析が適している。筆者は観客やスタッフとしてこれらの活動に2008年より当該フィールドにかかわっている⁷⁾。分析に用いる情報には、イベントで語られるメッセージ、イベントの実施内容などの参与観察により得られた情報、インフォーマルなインタ

ビューで得られた情報、イベントの周知などのために用いられる印刷媒体、インターネット上や著作として著されている内容などが含まれる。本研究ではこうした多様な情報を用いながら、「弱さ」の価値や意義を示す知見や、病気や障害にかかわる他の当事者による実践からの知見との比較を通して、当事者の「生きづらさ」を飼いならす術を検討する。

2-3. 本論文の構成

本論文では、まず「生きづらさ」を表現する人びとのありようを描写する。具体的には、心の病いやひきこもりなどの経験を有する人びとがあたかもひとつの家族、ひとつの共同体を構成することを示す。次に、表現活動の場は素朴に共通した経験を元につながる場ではなく、表現者は時に表現活動によって傷つき、弱い立場におかれる体験をしていることを示す。さらには「生きづらさ」は克服されているようにみえながらも存在し続けること、「生きづらさ」が多くの人の共感を呼ぶ形に作品として作られ、表現活動が続けられていく様を示す。

そして表現を通して「生きづらさ」を飼い慣らす上では、普遍性を持つ「生きづらさ」の探求が求められ、表現活動がその営みであること、「表現」自体が「弱さ」を内包するものであり、「生きづらさ」を飼い慣らす上で表現するという行為が重要な意味を持つことを示す。最後に知見を総括し、病気などを抱える当事者による「生きづらさ」の飼い慣らしは、「弱さ」を生み出す表現を通じた「生きづらさ」の探求によってなされることを示す。

3. 表現を通じた「生きづらさ」を抱える人びとの集まり

3-1. K-BOXという大家族

K-BOXは、病気やひきこもりなどの経験を抱える人びとが共感を得、社会復帰を目指すために集まっている団体というのみならず、芸能プロダクションとしての特性をもっており、そうした特徴が活動をユニークなものにしている⁸⁾。K-BOXでは、心の病やひきこもりの経験を有する人びとが出会い、レッスンなどの場で共に過ごし、イベントの企画を練り、イベントの準備や音響機器等の操作などの役割をメンバーが果たし、K-BOXというひとつの団体として活動を創り上げている。

このような活動をしているK-BOXは、あたかもメンバーがひとつの大家族のような様相を示す。たとえば2016年1月24日に行われたイベントは、K-BOXがひとつの「大家族」であることが象徴されるイベントとなっていた。このイベントは2016年にK-BOXが10周年を迎える節目の企画として行われたものである。

この日のイベントはK-BOXがライブ活動やレッスンを日常的に行っている福社会館の一室である和室で行われた。手土産を持ってメンバーが集まってくるという設定からイベントは始まり、手土産(お菓子やお茶)が客にも配られ、お客さんも含めて「家族」であることを示すセッティングとなっていた(写真1)。新春イベントということで、鏡餅がおかれ、ものまねや一発芸、普段はパフォーマンスをしないスタッフとして活動しているメンバーがパフォーマンスを行うなど、定例で行われているライブとは趣を異にするイベントとなっていた。なお2017年1月22日のイベントでは、つくられた「K-BOX大家族の歌」という歌を、イベントの最後に全員で歌う機会が設けられた。歌詞には、「失敗したって笑いあえる家族」「一人なんかじゃなかった」「温ったかい家族」「喧嘩もできる家族」「大切な家族」といった内容が含まれ、大家族としてのK-BOXの位置づけが鮮明

に表現され、歌をつくり、歌うことによって強調されたように見受けられた。また、K-BOXではスペシャルライブという形で年2回の大規模なライブがなされるが、終了後に交流会を行うことが定例となっている。交流会は新潟駅近隣の居酒屋で行われ、K-BOXのメンバーや観客が参加する。Kaccoさんと長い付き合いのある人の参加もみられ、「とうさん」「かあさん」「にいさん」「ねえさん」と家族のように呼ばれる人もなじみのメンバーとして参加する。なじみの店でギターを参加者間で交代で弾きながら盛り上がる様子は、メンバー間の密接なつながりを感じさせる。そこでは、表現活動にとどまらない私的なこと、たとえばあるメンバーに受診が必要なほどのケガをすといったトラブルが自宅で生じた際に、他のメンバーやKaccoさんに助けを求めるなどの体験が語られ(2015年12月20日)、メンバー自身も家族のような関係性があるものとしてK-BOXをとらえている様子が見えがえた。



写真1 家族の団らんをイメージしたようなK-BOXのイベント
(2016年1月24日)

3-2. こわれ者の祭典にみる「仲間」

こわれ者の祭典もまた、メンタルヘルス上の問題を抱えるなど、生きづらい人たちが集まる場となっている。そのつながりは「仲間」といった言葉で表される。代表の月乃さんは自作の『仲間』という詩を長年朗読しており、「全国百万人の『引きこもり』の皆様、僕の仲間だ。日本全国二百万人の『アルコール依存症』の皆様、僕の仲間だ」と表現する。「仲間」という言葉は、特定の人のリーダーシップに基づくものではなく、無名であることを前提にするゆるやかなつながりを持つ自助グループで広く伝統的に用いられている言葉であり、依存症の自助グループに通い続ける月乃さんが作品に取り入れているものである。最初は違和感あったが、「仲間」という言葉になじんでいった経験がイベントでも『仲間』を朗読する際に時折語られる。

イベントではメンバーの自作詩朗読などのパフォーマンスや、ゲストを交えたトークなどがなされる。例を挙げると、「うつ病」をテーマとしたイベント(2015年11月23日)では、87名の観客が来場し、パフォーマンスやトークを楽しんだ。ゲストにうつ病の経験者を招いたイベントとなり、ゲストから「消えるボタンがあれば押したかった」という切実な思いが語られたり、観客からの声を拾う場面では「リストラされて、自殺の名所に行った」という話が語られたりした。それに対して「会社に申し訳ないとか思わずとにかく逃げることが大事」といったコメントが出演者からなされた。また、ある観客はイベント中「頼んでないのにカウンセリングのようなことをしてくる人がいて困る」といった内容を語り、それに対して「自分もそういう思いを持っていたこともあり、優越感とか、役に立てるとかいう気持ちになりがちになる」、「そういう時は『ありがとう』といいながら離れていく」と出演者が応えていた。このように、出演者や観客が病気や障害を媒体に参集し、体験的知識が共有されていた。

また、先に挙げたK-BOX同様イベント終了後に行われる交流会も定例となっている。たとえば2015年12月26日に行われたこわれ者の祭典東京公演終了後居酒屋でなされた交流会では、40人程度の観客が参加していた。途中自己紹介の時間が設けられ、そこでは、統合失調症や、アルコール依存、職場でのストレスから病気になったといった自らの経験を参加者のほぼすべてが語っていた。筆者もその中に混じり、同じテーブルに座った人と、病気関係の話をしたり、昔のドラマの話など何気ない話をして交流を深めたり、別のイベントで会った人と、久しぶりの再会を喜んだりした。お互いに既知の人もいるが、そうでもない初対面の人も多い様子で、それぞれ交流を深めていた。

このように、「こわれ者の祭典」においてはイベントに参加したり、終了後の交流会を通して、思いや当事者ならではの経験や困りごと、その対処について語り合い、ゆるやかな、「仲間」といえるようなつながりをつくっている姿が見受けられた⁹⁾。

4. 表現活動における「弱さ」

表現活動は、「生きづらさ」を抱える人びとが時に密接につながり、共感し、体験的知識を共有する機会となっている。しかしながら、表現活動は単に参集・共感するのみならず、かかわる人びとが傷つき、弱くある状況におかれる場面も見受けられる。

4-1. イベントに対する批判

表現活動は多くの人の支持を得ているが、時に批判を浴びる。たとえばこわれ者の祭典は、お笑いを生業とする司会者が、出演者の経験を取り上げ、笑いをとるスタイルが特徴となっている。こうしたやり方であるからこそ、典型的な障害者像を崩し、「障害者を笑ってはいけぬ」という規範に風穴をあけ、逆説的に障害者と健常者のバリアを取り除く役割を果たしているが、一方で批判を受けることもある。「最低だというバッシング」を受けたと司会者の江口さん自身は語り¹⁰⁾、「こわれ者とは何事だとか、精神障害者をこわれ者とするのは、どういうことだとか、結構あった」という発言もイベント中にみられた(2013年1月13日)。筆者も「こわれ者なんて言い方は新潟ではしない。東京のイベントかと思った」と批判的に話す観客に出会ったこともあった(同日)。また、イベントのアンケートには(たとえば2017年1月7日)、「よかった」「楽しめた」といった肯定的なコメントが多く寄せられるが、一部「大切なことを軽んじていることにならないか」といった内容の記述や、同じパフォーマンスであっても、賞賛するようなコメントもあれば、一部否定的なコメントの記述がみられることもあった。

こわれ者の祭典をはじめとする表現活動の特徴や魅力はあえてタブーに切り込むあり様にある。こわれ者の祭典では、「予定調和で終わらせない」「レア感」を出す(2012年9月26日こわれ者の祭典打ち合わせなど)ということに価値をおいている側面もあり、批判と表裏一体の魅力のもと、表現活動はなされている。

4-2. 弱くある状況に置かれる表現活動

表現活動を行う中で表現者は批判を浴びるのみならず、様々な傷つき、弱い立場に置かれる体験をしている。K-BOXのライブは原則有料であり、「パフォーマンスをしてお金をいただく」という

芸能プロダクションとしての側面をKaccoさんは重視する厳しさを持つ。「(ひきこもりや心の病いを抱える人が)ステージに上がる勇気は相当なもの(2009年9月12日Kaccoさんおよびメンバーへのライブ後インタビュー 以下同)」であり、表現することで「バカだドジだって言われるのに慣れる。強さも磨かれる。」とKaccoさんはいう。K-BOXではクリスマスやハロウィンの時期のライブにはメンバーが仮装をしてライブを盛り上げる(写真2)。そうした際、たとえばトナカイの着ぐるみを着るといった趣向に対して、表現者が「恥ずかし」く感じ、「誰か別の人にまわしていいですか」とKaccoさんはメンバーに聞かれることもあったという。けれども、着ぐるみを着るメンバーは「緊張した」けれども、「今は慣れた」という(メンバー談)。「でもそれ(恥ずかしくて負担になっていることなど)でお客さんも喜んでくれて」「場数」を踏むことで対人恐怖症が「昔よりましになった」という(メンバー談)。また、K-BOXでは初めてステージデビューする人が「ものすごく緊張した」旨を語ったり(2016年1月22日K-BOXライブ時)、ステージ上で不安な様子を見せることもある。こわれ者の祭典では、パフォーマンスをするアイコさんの経験が語られる時に、他のパフォーマーから、「(アイコさんが)パフォーマンスを始めたころ、ぬいぐるみを置いて『(そちらをみて、自分を)見ないでください』と言いながら、パフォーマンスをしていた」というエピソードが語られることもあった¹¹⁾。このようにステージに立つことは負担の大きなことでもあり、「表現したい」との思いと、「恥ずかしい」「緊張する」「見られたくない」との思いの狭間で表現活動はなされている。

Kaccoさんは「甘えていい世界をつくりたいわけではな(2009年9月12日Kaccoさんおよびメンバーへのライブ後インタビュー 以下同)く、「キツイこと」をいうが、「こいつつぶしてやろうって思って、毒舌を振るったことは一回もな」という。そしてキツイことをいう裏には「信頼関係」や「愛」が重要であると語る。また、K-BOXではメンバー同士でうまくいかないことや対立がありつつも、そうした過程を経てパフォーマンスをライブの場で行うに至ったという話が語られていた時もあった(2013年8月18日イベント時トーク)。

そんな「毒」や「キツイ」状況がある中でもK-BOXのメンバーが生きづらい状況からの回復のきっかけを語る際には、「K-BOX」の存在を挙げることが多い¹²⁾。実際に、ひきこもりなどの状況にある人が様々なルートを経てK-BOXにたどり着き¹³⁾、ひきこもりや対人関係に恐れを持つ人びとの活動の幅を広げていくK-BOXの活動の意義は大きいと思われる。とはいえK-BOXに入ったからといって病気が治るというわけではなく、時には体調を崩し、活動を休止する人もいる。集団で活動する際にはトラブルも起こりうる。

K-BOXに所属する純名さんは、リストカットなどの経験を有するパフォーマーであり、ピアノの弾き語りをし、多くのファンを集めている。純名さんはK-BOXに入るときは、病気の人びとの中に入っていくことに抵抗感を感じていたが、「活動していくことでここ(K-BOX)もひとつの社会なのだ」と感じるに至ったという。そして、「人間関係を学ぶ場」としてK-BOXをとらえている旨を語っていた(2012年4月15日イベント時)。また、こわれ者の祭典の月乃さんは、「傷つくことがもう生きるためのスキルアップ」で、「仲間系の微妙な傷つき方を繰り返していくと、傷つき慣れする」と語る(2011年7月17日こわれ者の祭典イベント時)。そうした考えは『場数』という、嫌なことや傷つく場数を踏む意義を表現する詩に表されたりする。また、月乃さんは、イベント前に、人からどう見られるかを気にする不自由さを説いた書籍(岸見・古賀 2013)に触発されて制作した詩をイベント会場へ移動中にまとめており、その際に、メンタルヘルス系の悩みの大半は「人からどう見られているか」であることを話していた(2017年1月7日インフォーマルインタビューより)。こうしたことから、見られる「表現」は、「どう見られているか」を気にせざるを得ない、弱い立場におかれる経験であることがうかがえた。

表現者は表現活動で、様々な傷つく体験をし、弱い立場におかれる。人が多く集まる状況においては、必ずしも和気あいあいとした状況にあるというわけではないことは容易に想定される。ステージに立つ、レッスンで共に過ごす、といった表現活動のプロセスにおいては傷つき、弱い立場におかれる体験は「生きづらさ」を飼い慣らすうえで重要な意味を有していることが考えられる。



写真2 ライブ時の仮装(2014年12月21日)

5. 続く「生きづらさ」と「表現」

5-1. 「生きづらさ」は続く

こわれ者の祭典の代表の月乃さんは、会社員として日々過ごしながらか、表現活動を行っている。こわれ者の祭典をはじめとする活動も大きな評価¹⁴⁾を得るようになり、結婚し、子どもも生まれ、会社員生活や、育児に追われながら日々生活を送るようになっていく。こうした個人的なライフイベントについて月乃さんはイベントで語ることもある。こうした状況を受けてか、こわれ者の祭典後の交流会(2015年12月26日)では、「月乃さんがどんどん離れていくような気がする」と述べる観客の人もいた。こうした発言が意味するところは、結婚して子どもを持つという幸福な体験をしている月乃さんと、生きづらい渦中にいる人とは違うことを感じる人がいることを示していると思われる¹⁵⁾。

ただ、「生きづらさ」はなくなるものではない。月乃さんは、会社員として「砂を噛む毎日」(2015年11月23日イベント時)と表現する。カウンター達の朗読会では、アイコさんは「治っていたら遊びに行く」(2015年12月12日)と述べ、表現活動をして生きづらさを克服しているように見えながら、「みんな元気ではなく、「生きづらさ」を抱え続けていることが示される。アイコさんは、最近調子が良くないことを述べながら、「次のイベントまで生きていきましょう」とメッセージを投げかける(2016年3月6日こわれ者の祭典東京公演後交流会時より)。

月乃さんは、自身の子どもに対する思いを、誕生日子どもをポポちゃんと仮に呼んでいたエピソードを紹介しつつ、「ポポちゃんに伝える言葉」という詩にしている。そして、「ポポちゃん、パパのシラフの人生は、恥をかいて笑われることの連続でした。それは今も続いています。ポポちゃんも、家の恥になること、世間様から笑われることを恐れなくて生きていて下さい。」「どんなところに行っても、ポポちゃんをいじめたり意地悪な人は必ずいます。どんなところに行っても、優しい人ばかりいる『優しい天国』は、どこにもないのです。優しくない人と一緒にいることも、時には大切なことです。」と表す。そして、ポポちゃんがパパとママの「希望」であり「絶望なのかもしれない」とし、「いつか、別々の人生を歩んで行く時が、必ず来るのですね。」「そして、いつの日か、パパ

とママの手を離れて、ポポちゃんあなたの人生を、自由に生きていって下さいっ!」と続く。そこには、自らの経験を踏まえた子どもへのメッセージとして、「生きづらさ」がどこにいてもいつまでも続くこと、幸せを感じる時が失われることもまた生きづらいことであろうことが表されているように思われる。

また、表現活動からは、「生きづらさ」が続いていくことを表す重要性と、「生きづらさ」は病気などの当事者のみが抱えるものではないことがうかがえる。アイコさんは、「がんばっている」「ひきこもるのはやさしいからだ」という考えや、障害者だからと美化されることに抵抗があるという¹⁶⁾。そして、「テレビとかでも、障害者ががんばって立ち直ったストーリーではなく、挫折した姿を流してほしい(2015年12月12日イベント時 以下同)」という。また、アイコさんは「障害者だけががんばっているわけではなく、「健常者もすごくがんばっている」とも述べる。これは障害者もそうではない人も、続く「生きづらさ」の中で生きており、一定の普遍性を有するような「生きづらさ」が表現されているように思われる。

K-BOXで自作曲の弾き語りなどのパフォーマンスを行うmotchyさんは、ライブ中(2016年2月14日)「人の一生を本にできるというけど、人の人生は音楽にできると思って」いると述べていた。イベント終了後に話を伺ったところ「うまくいえないけど、人の人生は音楽にできる。それは100万枚売れなくても、誰かに響き、救いとなると思っている。テーマである『命』が自分には先にある。うまくいえないけど・・・」と述べていた。これは、音楽などの作品が「人生」の表れであり、そこには「命」といった、続く「生きづらさ」を生きる中での普遍性を有するテーマが表現活動で扱われていることを示しているように思われる。

5-2.「表現」も続く

当事者でもある表現者は、自作詩などの作品を制作し、表現することを重視する。K-BOX、こわれ者の祭典も活動期間は10年を超えて続き、カウンター達の朗読会も時折中断を挟みながら続いている。イベントは公開されるのみならず、インターネット上で動画配信されることも多く、多くの人が視聴する状況にある。カウンター達の朗読会(2015年12月22日)では、観客が撮った映像が観客からネット上にあげられ、それを主催者は非難するわけでもなく歓迎し、「SNS等で自由に写真や動画などは使ってほしい」といった旨の案内がイベント中になされていた。また、イベントを中心としながらも、当事者や家族向けの講演会、加えて著書の出版、地域の祭りやイベントへの出演等、広く公開された活動を行っている。

作品は長年朗読などの形で表現され続けるものもあれば、新たに制作されるものもある。適宜変更が加えられることもある。月乃さんは、自らの経験を踏まえつつ、「気持ち悪いと思われるのを否定するのではなく、気持ち悪く生きていこう」と、生きづらさを抱える人びとへのメッセージへとなるように作品を会場へ移動中にまとめていた(2017年1月7日)。『仲間』という詩においては、自らの経験となる依存症、ひきこもりのみならず、「統合失調症」「筋ジストロフィー」等々の疾患・障害名などを挙げつつ、「孤独に苦しむ仲間」を表現する。Kaccoさんも、女装パフォーマンスというスタイルに合わせて、多くの人に共通する悩みを持つ女性を主人公としたストーリーを紡ぎ、「大丈夫と言ってほしい」との気持ちを込めた作品を作り、表現する(2017年1月7日など)。カウンター達の朗読会では、「あなたの叫びをこの空間に泳がせます(2015年12月22日イベント案内フライヤー等の記載)」と、メールで募集した観客、視聴者からのメッセージを作品に組み

込んで表現する。これらは孤独や不安などに苦しむ多くの人びととの共感につながるメッセージとなるよう、「生きづらさ」が制作のプロセスを通して編集・表現される姿であるように思われる。

一見「生きづらさ」を克服しているようにみえる表現活動においても、表現者は生きづらい中、時に様々な傷つく体験をしながら弱い立場に身を置き続け、多くの人の共感を呼ぶ形に「生きづらさ」を編集・表現し続けている。

6. 考察

6-1. 「生きづらさ」の探求

本研究の主張のひとつは、「生きづらさ」の探求が「生きづらさ」の飼い慣らしにおいて重要なのではないかということである。

表現を通した「生きづらさ」を抱える人びとの集まりは様々な様相を示す。家族のような様相もみせれば、表現という形をとることにより、インターネットなど様々な媒体を通したつながりがつくられ、広く生きづらさを抱える人びとの共感の輪を広げている姿が見いだせる。このような、固い結束や広いつながりがつくられる上で「弱さ」は重要である。セルフヘルプ・グループで語られる経験により共感を得、集まっているように[Hill 1984=1988; Katz 1993=1997など]、リアルな自らの経験、特に自らの弱さを曝すことが孤立に陥りがちな人びとのつながりをつくる。本研究からも、「生きづらさ」を克服した姿ではなく、「弱さ」を抱えながら表現していくことが「生きづらさ」を飼い慣らす術となっていることが示される。それは従来検討されてきたセルフヘルプ・グループでなされる実践に通じるものであり、脆弱性(バルネラヴィリティ)が、人や社会との関係性を開くことに寄与するという知見[金子 1992]を支持するものとなる。

加えて本研究で考察されるのは、普遍性を有する「生きづらさ」の探究が、「生きづらさ」を飼い慣らす上で重要な意味を持つということである。各々の当事者ならでのリアルな生々しい体験は、部外者が客観的に述べる事実と比して、重み、深みのあるものであり、表現を通した「生きづらさ」の飼い慣らしにおいてリアルな固有の経験談は欠かせない。しかしながら、表される「生きづらさ」は、克服されるものではない多くの人に共通する「生きづらさ」でもある。表される「生きづらさ」は時に疾患に特異的なものでありつつも、孤立や孤独などより深い次元において多くの人びとに共通したものであるとも考えられる。いわば、「根源的な存在様式」としての苦悩[浮ヶ谷 2015]、すなわち、病者や当事者であろうともなかろうとも、「生きる上で引き受けなければならない(浮ヶ谷 2014: 276)」、生老病死をめぐるすべての人間に共通する「人間の根源的なスタイル(浮ヶ谷 2015: 1)」にある性質としての「生きづらさ」が表現活動において探究されていると考えられる。

表現活動において当事者である表現者は「生きづらさ」へアクセスするために表現活動を続け、表現活動には弱くあろうとする志向が見いだされる[杉本 2011, 2013]。これは、「弱さ」を活用する志向であることに加え、特定の「生きづらさ」を克服してもまた次々と生じる根源的な存在様式としての「生きづらさ」を探求する志向であるように考えられる。「生きづらさ」の探求は、「生きづらさ」のある混沌とした状況を前提とした固有の経験のリアルさに普遍性を加味する形の、「生きづらさ」の飼い慣らしとなっていることが考えられる。「生きづらさ」は単に除去されるわけでも、固有の経験としてコントロールされるものではなく、普遍性・根源性を探求される中で飼い慣らされるものと考えられる。

6-2. 表現という行為

本研究の主張の2点目は、「生きづらさ」を飼い慣らす上で、病気や障害の経験としての「弱さ」と共に、表現するという行為において生み出される「弱さ」が重要であるということである。

表現者は「生きづらさ」をパフォーマンスなどの形で表現することによって自らを弱い状況に置く。表現することで「見世物にしている」といった非難を浴びることもある。コンプレックスになっていることをイベントであえて取り上げられることは表現活動の中核をなす特徴となっている。時に団体内部において対立が起きたりもすることもある。当事者団体は一枚岩ではなく、「意見の相違やメンバー同士の葛藤などおよそあらゆる人間の集まりに生じる課題が存在する[中田 2007: 1094]」のであり、表現者は表現をすること—その企画や運営も含めて—で非難に曝され、弱くありながら表現活動を続ける。そして人から見られる「表現」をすること自体が、見られることを不安に感じる表現者を、さらに「弱くある」状況に置く。

「弱さ」が可能性や価値を有することは示されているが(金子 1992; 松岡 2005など)、本研究で積み重ねられる知見としては、経験談などの表現による内容の「弱さ」の価値に加え、表現という行為自体に「弱さ」があり、それゆえに表現することが「生きづらさ」の飼い慣らしとなっているということである。自発的にアクションを起こすことは自らを脆弱な状況にすることとされる[金子 1992]。表現のように能動性をもって行為することは、「弱さ」の対極としてとらえられる側面もある一方、弱くあり続ける形の「生きづらさ」の飼い慣らし方であると考えられる。本研究からは、表現は「弱さ」を克服するためというよりもむしろ、自らが弱くあるため、「弱さ」を生み出すための行為であり、「生きづらさ」は表現という行為を通して、自らが弱いままに飼い慣らされていくことが考えられる。

6-3. 表現を通した「生きづらさ」の探求

ここまで、表現を通した「生きづらさ」の飼い慣らし方として、普遍性を有する「生きづらさ」の探求と、表現という行為があることを述べてきた。ここではその両者の関係、表現のプロセスを通して「生きづらさ」が探求されることについて考察する。

本研究フィールドで活動する人びとは、表現することを前提に、自らの経験を元にした詩を創作し、歌をつくり、経験を話したりと「表現」する。福祉施設職員で民俗学者の六車(2015)は、聞き書きという取り組みにおいて表現を考察している。そこでは、利用者さんから聞いたことを書き、著書などで表現することに対して「利用者をネタにして[六車 2015: 298]」という批判を浴びることを述べている¹⁷⁾。しかし、表現することは利用者さんとの共同作業であり、表現することが前提となることによって、「編集」のプロセスが入り、その内容も深みを帯び、利用者さんを深く理解することにつながるという[六車 2015]。本研究フィールドにおける表現者も、制作、表現の過程で、自らの体験を踏まえつつ、「生きづらさ」をより普遍性や深みを有する形に「編集」し、編集等表現活動におけるプロセスを通して「生きづらさ」の探求はなされることが考えられる。

「弱さの情報公開」という浦河べてるの家のキャッチフレーズがあるように[向谷地 2002]、本研究においても「弱さ」が表現され、公開されることによって「生きづらさ」は飼い慣らされることが考えられる。また、「当事者研究」という形で多くの術が探求され、共有される取り組みがなされているように[浦河べてるの家 2005]、多くの当事者活動でも「弱さ」を元に共感や、患者の知の共有がなされていることが示されている。本研究からは、表現は、「弱さ」を克服・利用するのみならず、自らが弱くある、いわば「弱さ」を生み出すための手段・プロセスであり、普遍性を有する「生きづらさ」を探求する営みであると考えられる。

7. 結論

本研究では、いかにして「生きづらさ」が飼い慣らされているのかを当事者による表現活動を通して「弱さ」の知見を踏まえつつ考察した。その結果、「生きづらさ」の飼い慣らしは、「弱さ」を生み出す「表現」を通して、人間存在にとって普遍的・根源的な「生きづらさ」を探求することによってなされることを示した。従来より、経験を語り、共有することによって、人びとがつながることは示されていた。また、共感をもとにしたつながりをつくり、困難ごとに対する対処法の開発・共有をなす上で、「弱さ」が一種の資源、財産となることが示されていた。本研究はそうした知見を支持すると共に、表現活動によりなされる普遍性・根源性を有する「生きづらさ」の探求および、「弱さ」を生み出す「表現」が、「生きづらさ」の飼い慣らしの術となることを述べた。一見能動的な「強い」表現活動は、「弱さ」を「強さ」に転換させているのみならず、弱くあるため、「弱さ」を生み出すための実践でもあり、同時に「生きづらさ」を編集し、洗練させる実践としてとらえられるものである。

パフォーマンスなどの表現活動は、当事者活動の中でも特徴的な活動であるが、ステージ上でパフォーマンスすることのみが表現というわけではなく、各種セルフヘルプ・グループで経験を語ること、誰か個人的に自らの「生きづらさ」を語ることも表現としてとらえられると考えられる。こうした実践もまた、表現を介した「生きづらさ」を飼い慣らす術を駆使している実践であると考えられ、本研究で示した「生きづらさ」の飼い慣らしは特殊な一部の人びとの知というより当事者の知として一定の普遍性を有することが考えられる。

最後に今後の課題を述べる。まず、本研究では「弱さ」と「生きづらさ」を区分し、考察してきたが、それらの関係の整理をすすめていくことが求められる。すなわち、「生きづらさ」の探求と「弱さ」の関係はいかなるものか、特に、いかにして「弱さ」が「生きづらさ」の探求を促すのかの考察が求められる。また、本研究では「弱さ」を元に分析を進めたが、「弱さ」と「強さ」の二元論的立場を超える思想が求められていること[高橋・辻 2014]を鑑み、「弱さ」「強さ」といった二元論的立場を超えた視点で研究を進めていくことが求められると考える。生々しく生き延びる強さと、「弱さ」を同時に感じさせる「生きづらさ」の表現の場からいかなる可能性が生み出されるのか継続して検討していくことが求められる。

謝辞

本研究フィールドとなる活動の関係者の方々に感謝いたします。また、論理構成が乱れがちな筆者に対し、貴重なご指摘をくださいました査読者の方々に感謝いたします。本研究は新潟医療福祉大学研究奨励金の助成を得て行われました。感謝いたします。

注

- 1)「飼い慣らす」という言葉は本研究で初めて用いられるものでもない。たとえば、以下のように「都市の飼い慣らし」という形で用いられることもある。以下は松田(1996)の引用である。「絶望の都市世界に飛び込んでも、彼らは自らの能動性によって、最後にはその世界を彼らの側に奪い返してきたからである。圧倒的な絶望世界を内部から突き崩し、自身の生活の便宜に合わせて、再構築していく。それはまるで『都市の飼い慣らし(ドメスティケーション)』過程といってもよいものだった[松田 1996:16]」。また、本研究が方法論的に準拠する医療を包括的にとらえる医療人類学においても「飼い慣らす」という言葉が用いられることもある。そこでは糖尿病を事例に「医療的言説をどのように自分なりに解釈しているのか、また治療実践を自分の生活習慣としてどのように組み込んでいるのか、あるいは治療についての情報をどのように取捨選択しているのか等を描き出すために[浮ヶ谷 2004:73]」、「飼い慣らす」という言葉が分析用語として用いられている。
- 2)なお、調査にあたっては、表現者はステージネームを表現活動を行う際には用いており、本研究の表記もそれに倣っている。一部、司会者等ステージネームを用いていない人には個別に了解を得ている。また、個別に了解を得ることが難しい際—イベント中の観客の反応の記載など—は、個人が特定されないよう一般的な内容の記述に留め、関係者の情報はライターなど文書や広くインターネットで公開されている情報のみを用いるなどの配慮を行った。
- 3)Kaccoさんはひきこもっていて苦しかった時に、イラストのオファーがきたことが生きづらさの渦中から脱出するきっかけとなったと語る(2013年6月1日トークライブなど)。
- 4)なお、近年、K-BOXの活動は全国規模のテレビ番組で取り上げられるなど注目を浴びている。2015年11月24日にはK-BOXがNHKの番組(ハートネットTV「もう一度自分を信じるために ～ひきこもりからの挑戦～」)に取り上げられた。それ以降、問い合わせの電話も増えているという(2015年12月26日インフォーマルインタビューより)。
- 5)月乃さんは、自身の体験を踏まえた内容を記した著書や、依存症に関する著書を多数出版している。また対談などの形をとって、こわれ者の祭典のメンバーも著者として執筆するなどの著作活動を行っている。
- 6)「カウンター達の朗読会」は、アイコさんと共に、葛原りょうさん、Tokinさんという表現者が行っているイベントとなっている。
- 7)こわれ者の祭典については運営補助などのスタッフとして、K-BOXは主に常連の観客として活動に2008年よりかわり、筆者はイベントへの参加や、打ち合わせ、イベント後の交流会などの活動に参画している。
- 8)K-BOXのメンバーは、パフォーマンスを行うのみならず通信制高校のサポート校に校歌を提供したり(Merry'zというK-BOX所属のバンドが作詞作曲)、地域のゆるキャラのイメージソング(同じくK-BOX所属純名さん作詞作曲)を作るなどの多様なプロダクションとしての活動を行っている。
- 9)なお、こわれ者の祭典では様々な自助グループや相談窓口の連絡先を記した用紙をイベント時に配布しており、こわれ者の祭典に限らず、それぞれがそれぞれに適したつながれる場をつくることを促している。

- 10)「こわれ者の祭典は何処からきたか」
(<http://sky.geocities.jp/tukino42/evint/taidan.html>2016年2月8日閲覧)などを参照。
- 11)たとえば2015年6月20日富山でのイベントにおいて月乃さんがこのようなエピソードを話している。
- 12)たとえば2015年10月31日看護職者への講演会時のメンバーの発言、K-BOXメンバーのいっしーさん著書の記述など
- 13)K-BOXのライブを見に来ること、Kaccoさんが非常勤の相談員として勤務している病院での出会い、知り合いのカウンセラーなどからのルートなどがK-BOXとかかわるきっかけとして挙げられる。
- 14)月乃さんは新潟弁護士会人権賞(2010年)や生き様を表彰する安吾賞新潟市特別賞(2011年)をはじめとする受賞歴も多い。
- 15)月乃さんは、こうした実情を踏まえて、イベントで、渦中にある人の生々しさや迫力が欠けてくることを懸念している。アイコさんの行っているカウンター達の朗読会は「現役のヒリヒリ感」があるといい(2015年10月9日イベント打ち合わせ時)、渦中にある人の魅力、渦中にある人の表現から共感を生むことの意義を感じている。
- 16)たとえば2015年6月20日インフォーマルインタビュー、2015年12月12日イベント時発言など
- 17)この点については、執筆をする筆者自身にとっても切実な課題となっている。
六車(2015)は「倫理的抵抗感を超えた意味(六車 2015: 299)」が表現にあるとする。

参考文献

Corbin,J. and Strauss,A., 1985, " Managing Chronic Illness at Home:Three Lines of Work, " Qualitative Sociology. 8(3), pp.224-247.

Eisenberg,L., 1977, " Disease and Illness:Distinctions Between Professional and Popular Ideas of Sickness, " Culture, Medicine and Psychiatry. 1, pp.9-23.

Hill,K, 1984, Helping You Helps Me: A Guide Book for Self Help Groups, Canadian Council on Social Development.(=岩田泰夫・岡 知史訳, 1988, 『患者家族会のつくり方と進め方:当事者組織:セルフ ヘルプ グループの手引』川島書店.)

Katz,A.,H., 1993, Self Help in America: A Social Movement Perspective, Twayne Publishers. New York.(=1997,久保紘章訳『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社.)

Young,A., 1982, "The Anthropologies of Illness and Sickness, " Annual Review of Anthropology. 11, pp.257-285.

足立龍太郎, 2000, 『アウトサイダーアート』求龍堂.

浮ヶ谷幸代, 2004, 『病気だけど病気ではない:糖尿病とともに生きる生活世界』誠信書房.

浮ヶ谷幸代, 2014, 「第9章 『適度な距離』の模索:医療専門家のサファリングの創造性」
浮ヶ谷幸代編『苦悩することの希望:専門家のサファリングの人類学』世界思想社. pp.255-281.

浮ヶ谷幸代, 2015, 「序章 サファリングは創造性の源泉になりうるか?」浮ヶ谷幸代編『苦悩とケアの人類学』世界思想社. pp.1-21.

浦河べてるの家, 2005, 『べてるの家の「当事者研究」』医学書院.

岡知史, 1988,「セルフ・ヘルプ・グループの働きと活動の意味」『看護技術』34(15), pp.12-16.

金子郁容, 1992, 『ボランティア:もうひとつの情報社会』岩波書店.

川北稔, 2009, 「若者の『生きづらさ』と障害構造論」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』12, pp.293-300.

岸見一郎・古賀史健, 2013, 『嫌われる勇氣:自己啓発の源流「アドラー」の教え』ダイヤモンド社.

倉本智明, 1999,「異形のパラドックス:青い芝・ドッグレッグス・劇団態変」石川准, 長瀬修編『障害学への招待:社会、文化、ディスアビリティ』明石書店. pp.219-255.

自立生活センター協議会編, 2001, 『自立生活運動と障害文化:当事者からの福祉論』現代書館.

杉本洋, 2011, 「表現する生存者の戦術的实践:経験の深化と『正常』と『異常』の再構成」『文化看護学会誌』3(1). pp.10-19.

杉本洋, 2013, 「『生きづらさ』をパフォーマンスする人々のつながりを形成する戦略: 共通性による共感と障害の価値転換を越えて」『アートミーツケア学会誌』5. pp. 21-36.

高橋源一郎・辻信一, 2014, 『弱さの思想: たそがれを抱きしめる』大月書店.

田畑稔, 2010, 「若者の『生きづらさ』へのアプローチ」『人間科学研究』4. pp. 5-21.

中田智恵海, 2007, 「セルフヘルプグループと医療専門職」『看護学雑誌』71(12). pp.1092-1095.

西倉実季, 2010, 「『異形』から『美』へ: ポジティブ・エクスポージャーの試み」倉本智明編著『手招くフリーク: 文化と表現の障害学』生活書院. pp.77-101 .

服部正, 2003, 『アウトサイダー・アート: 現代美術が忘れた「芸術」』光文社.

藤澤美佳, 2014, 『生きづらさの自己表現』晃洋書房.

松尾豊, 2015, 『パブリックアートの展開と到達点: アートの公共性・地域文化の再生・芸術文化の未来』水曜社.

松岡正剛, 2005, 『フラジャイル: 弱さからの出発』筑摩書房.

松田泰二, 1996, 『都市を飼い慣らす: アフリカの都市人類学』河出書房新社.

向谷地生良, 2002, 「弱さを絆に: 『弱さ』は触媒であり稀少金属である」浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論: そのままでいいと思えるための25章』医学書院. pp. 188-196.

六車由美, 2015, 『介護民俗学へようこそ!: 「すまいるほーむ」の物語』新潮社.

横塚晃一, 2007, 『母よ! 殺すな』生活書院.

鷺田清一, 2001, 『<弱さ>のちから』講談社.